

『星の王子さま』を読む (3)

——「飼いならす」ことのレッスン——

芦田 徹郎

Reading *Le Petit Prince* (3):

Lesson of *Apprivoiser*

ASHIDA Tetsuro

Abstract: Chapter 21 of Saint-Exupéry's *The Little Prince* (*Le Petit Prince*) is one of the climaxes of the story. And, the theme of the dialogue between the little prince and the fox in this chapter, the verb “tame” (*apprivoiser*) is one of the most important key words of the story. The fox, who preaches to the little prince of the importance of *taming*, does not seek *to tame* the little prince, but *to be tamed* by him. On the other hand, while the little prince wants to play with the fox, he refuses *to tame* him (although he eventually agrees), which is a condition set forth by the fox. I would like to carefully decipher what is meant by the inconsistent exchanges between the two over this important keyword.

Key Words: translation, triangulation, tame (*apprivoiser*), unique in the word (*unique au monde*)

要旨: サン＝テグジュペリ著『星の王子さま』の第21章は、この物語のクライマックスの一つである。また、この章で繰り返し上げられる王子さまとキツネとの対話のテーマである「飼いならす」は、この物語のもっとも重要なキーワードの一つである。ところが、王子さまに「飼いならす」ことの大切さを説くキツネは、王子さまを飼いならそうとはせず、王子さまから「飼いならされる」ことを求める。王子さまも、キツネと遊んでもらうことを求めながら、キツネがその条件だという「飼いならす」ということをいったんは拒否する。重要なキーワードをめぐって繰り返し上げられる両者のちぐはぐなやり取りが意味するところを、ていねいに読み解いていきたい。

キーワード：翻訳、三角測量、飼いならす、世界に一つだけ

1. 翻訳を読む

私は、サン＝テグジュペリの『星の王子さま』(*Le Petit Prince*, 1943)を、その言説相互の「関連性」と「呼応関係」に留意しつつ丹念に読むことで、テキスト内在的な考察を試みている。ただ、私は、その試行において重大な問題を抱えている。それは、フランス語原文を自力では満足に読めないという、ある意味で致命的な欠陥である。

したがって、この物語の考察にあたっては、紙幅の

制限のため十分なレファランスを付けていないが、多くの邦訳書や解説書に頼っている。また、テキストの引用や言及にあたっては原語を付したところがあるが、当該箇所からの忠実な訳出というよりも、記述の根拠となる原文を指示しているにすぎない。

内藤濯による初訳(1953年)以来、『星の王子さま』に幼いころから接したという人は多い。また、推薦・課題図書に指定されるケースも少なくない。ところが、手に取ったもののよく理解できなかったという経験談にもこと欠かない。こうした実情について、加藤晴久は、内藤訳を取りあげ、読者の多くが「ピンと

こない」という印象をもつ「原因」を、「翻訳が間違っていたり、不適切だったりする箇所も多数あるが、もっと根本的に『翻訳作法』そのものが問題なのだ」(加藤 2007: 63) と、厳しく批判している。

そうは言っても、正確な原文理解と翻訳を厳格に追求するのであれば、「翻訳で読むのではなく、この作家とその作品を愛する者が、フランス語原文を、自分で読む、また、自分で訳すのがいちばんである」(同上: 108) という、翻訳という営為の否定に近い結論に至るであろう。

他方、塚崎幹夫は、この物語を読むことについて、「原文がそう簡単にだれにでも味わえるわけではない」として、「翻訳を読む」ことの効用をむしろ積極的に評価している。「たどたどしく原文を読むよりは、信頼のおける翻訳を読むほうがはるかに作品の中心に近づきうる」というのである(塚崎 1982: 8)。

私のように翻訳に頼る者には心強い言葉であるが、「[翻訳の] いいまわしが多少不完全でも、読者に想像力があれば、作品が十分に生きることがある」のだという留保がついている。「すぐれた翻訳がある場合、それでもなお作家の導こうとしている世界に入れないとしたら、読者が悪いといわねばならない」と、釘が刺されてもいる(同上: 9)。

この言葉を励ましと戒めにしたいと思う。ただ、厄介なのは、「作家の導こうとしている世界」に迷いなく導かれるような「すぐれた翻訳」をいかにして見極めるかという難問である。ここでも加藤晴久の言葉を借りれば、「翻訳どうしをいくら比べても、良し悪しは判定できない」のであり、結局は「当該の翻訳書の元の言語を知らない者はその翻訳の良し悪しを論ずる資格がない、ということになる」(加藤 2007: 48)。またしても、「振出しに戻る」である。

ところが実際には、*Le Petit Prince* の邦訳書は、翻訳権の失効(2005 年)後の新訳もすでに 30 点前後にも達しており、相変わらず多くの読者を獲得している。邦訳書を典拠にした論評や議論も、枚挙にいとまがない。「世界でも例を見ない「星の王子さま」王国・ニッポン」(NHK・ETV 特集「「星の王子さま」と私」2007. 2. 17 放送)と言われる所以である。

この「王国」の形成にあたっては、この物語自体の魅力もさることながら、内藤濯の発案になる「星の王子さま」という邦訳書名によるところが大きいということでは、大方の見方が一致している。内藤の訳業をきわめて厳しく論難する加藤晴久も、このタイトルが「絶妙」であることは認めている(加藤 2007: 64)。後

続の訳書の多くも、このタイトルを踏襲している。

それと同時に、「星の」という原著名にはない語句が付け加えられたことで、タイトルのひとり歩きと、独特の「王子さま」像が形成されたことも否めない。この物語を共通の話題にするのに、もはやこのタイトルを抜きにしては難しい。同時に、タイトルのイメージを裏切るような *Le Petit Prince* 論を公にすることが憚れる空気がないわけでもない。善かれ悪しかれ、翻訳の影響の大きさを思わずにはおれない。

この物語の邦訳体験をもとに翻訳論を著わした稲垣直樹は、「翻訳は読者に代わって原典を百パーセント理解し、理解した原典の意味と感動を、読者が首をかしげることなく、読者に百パーセント理解してもらおう作業」であるという。また、「読者に代わってすべてを考え、すべてを一点の曇りもなく伝える」、あるいは「原文の読めない読者に代わって原文の意味を徹底的に明らかにし、日本語で表現する。そして、読者が無駄に頭を使ったり、戸惑ったりすることのないようにお膳立てをする」ことだともいう。そして、そうした翻訳の心がけを「無私の精神」と宣言している(稲垣 2016: 16, 116, 218)。頭の下がる使命感である。

他方、インパクトのある「3本のバオバブ」解釈で知られる塚崎幹夫は、翻訳によって原文の真意が損なわれることは否めないが、「[翻訳で] 読みとったことを、想像力を働かせて補って、一〇〇パーセントにも一二〇パーセントにも還元させる努力が読者に要請されている」と主張する。そして、それにもかかわらず、「この読者の義務が強調されることが最近では少なくなっている」と嘆いている(塚崎 1982: 9)。40 年前の指摘だが、今やいっそう心すべき苦言である。

翻訳家の「無私の精神」には感謝しかないが、それに「100 パーセント」甘えることは、「読者の義務」を放棄することになる。他方では、時に「曇り」がちに見えなくもない翻訳に「首をかしげ」つつも、「原典の意味」を自分なりに「理解」しようと「考える」、「読者の権利」もあるのではないかと思う。

翻訳(者)に満腔の敬意と謝意をはらいながらも、すべてをゆだねるのではなく、自分なりに原典に迫る読み方を模索することは必要であり、可能でもあろう。その点、多数の邦訳書が出版され、いくつもの研究書や論文やエッセーが世に問われているわが国の状況と、拙いながらも原語を少しは理解できるということは、それなりに利点があるようにも思える。

私は、原文と翻訳と別の翻訳と(可能なら他の外国語訳も)読み比べるという、一種の「三角測量 trian-

gulation」を施すことによって、作品を読解するための精度と利便性の高い見取り図を得ることも可能になるのではないかと期待している。私の「星の王子さま」論は、ささやかなフランス語読解能力と、多くの邦訳書の読み比べとで成立している。

この物語のなかで、「三角測量」がとりわけ有効だと思われる場面のひとつが、キツネが王子さまに向かって「apprivoiser」の大切さを説く21章である。この単語は、この章だけで16回（物語全体で17回）も出てくるが、どの訳語を採用するか、訳者たちももっとも苦勞する一語と言って過言でない。

このフランス語は、一般的には「飼いならす」と訳されることが多く、通常はこの日本語で原語の意味を損なうことはあまりないと思われる。しかし、この物語の場合、この訳語を当てること、あるいはこの訳語で統一することを避けた邦訳書が少なくない。

最初の邦訳者である内藤濯は、「飼いならす」のほか、「なつく」「仲よくする」「じぶんのものにする」「めんどろをみる」と、全部で5系列の言葉に訳し分けている。新訳書でも、内藤訳ほど多様ではないにしても、訳し分けているものは少なくない。訳し分けのベクトルが働くのは、キツネが使う原語の含意を一語で表す日本語を見つけにくいからである。

他方、「飼いならす」で統一しているものや、「手なづける」「なつかせる」「なじみになる」といった、別の訳語で統一しているものもある。統一化のベクトルが働くのは、この言葉がキーワードだからである。

「飼いならす」という、一般的には適切と思われる日本語を当てるのを躊躇する傾向があるのは、キツネが使う「apprivoiser」と日本語の「飼いならす」とのあいだに、かなりの語感の隔りがあるためである。そのため、訳者たちは、「読者が無駄に頭を使ったり、戸惑ったりすることのないよう」腐心していると思われる。しかし、私は、こここそ、「〔翻訳で〕読みとったことを、想像力を働かせて補って、一〇〇パーセントにも一二〇パーセントにも復元させる努力が読者に要請されている」場面ではないかと考えている。

キツネが教える「apprivoiser」とは何か。それを理解する基点として、私には、その訳語は「飼いならす」こそがふさわしいと思われる。この違和感が残る訳語を避けて、戸惑いのない言葉を使う（使い分け）のでは、王子さまとキツネとのやりとりに付きまとう不協和と緊張感を稀釈し、取り扱いが難しいこの言葉を「飼いならす」つもりが「飼い殺す」ことになりかねないのである。

「apprivoiser」とは何か。その詳細な検討は別稿にゆずるとして、まずは、この言葉をめぐるキツネと王子さまとの対話にしっかり耳を傾ける必要がある。

2. 世界に一つだけ

地球にやってきて、自分の「小ささ」を思い知らされて悲しくなった王子さまは、そこに現れたキツネに「遊ぼう」と誘うが、「飼いならされていない」からと断られる。そこで、「飼いならす」とはどういう意味か *Qu'est-ce que signifie « apprivoiser » ?* と、王子さまが同じ質問を三度繰り返すと、ようやくキツネは、「絆を結ぶ」ということなんだけど *Ça signifie « créer des liens... »* と答えるのである（芦田 2022）。

そこで、王子さまが「絆を結ぶだって？」とオウム返しに尋ねると、キツネは、飼いならせば、それまで無関係であったものが「お互いになくはならない *avoir besoin l'un de l'autre*」もの、「かけがえのない（世界にひとつだけの）*unique au monde*」ものになると説明する。つまり、王子さまがキツネを飼いならせば、王子さまはキツネにとって「世界でひとりだけの男の子 *unique au monde*」になり、飼いならされたキツネも王子さまにとって「世界で一匹だけのキツネ *unique au monde*」になるというわけである。

そこで早くも、王子さまは「わかってきた *Je commence à comprendre*」つもりになったようで、「一本の花がどうもぼくを飼いならしてくれてたようだ *Il y a une fleur... je crois qu'elle m'apprivoisé...*」と、キツネの話に割って入ってくる。

このくだりについて、その言葉どおり、「花」（バラ）が王子さまを飼いならしていたことに気づいたとする解釈や解説がほとんどである。「すべてはテキストのうちにあり」としてテキストに即して読むことの重要性を強調した加藤晴久も、「王子自身が言っているように、王子とバラはやはり互いが飼いならし合った仲である」としている（加藤 2007: 44, 傍点は芦田）。その「互いが飼いならし合った」のうち「バラが王子を飼いならした」というのは、先ほどの王子さまの言葉を論拠にしたものであろう。

ところが、加藤がテキストからくみ取った両者のあいだでの「飼いならす」ことの具体的な例示は、「バラの虚栄や気まぐれにもかかわらず、王子があれこれと面倒を見た」ということであり、「〔王子さまが〕自分の星に帰ってからもヒツジやトラの餌食にならないように気を配ってやるから、バラのために『時間を無

駄にする』というものである (加藤 2007: 44)。しかし、そうしたことであるならば、「王子さまがバラを飼いならす」ことの事例であろう。加藤は、「バラが王子さまを飼いならした」に対応する具体的な言説を、テキストに即して提示していない。

キツネは、実は王子さまもその後は、「花」を主語、王子さまを目的語にして、「飼いならす」を語ることはない。両者の関係では、この場面での王子さまのひと言を除けば、「飼いならす」の主語は常に王子さまであり、「花」はいつもその目的語になっている (したがって、「互いが」という解釈にも疑問が残る)。

案の定、「花が飼いならした」という王子さまの「気づき」に対するキツネの反応は、「ありうることだ (そんなこともあるさ) C'est possible」, 「地球の上ではなんだってあるんだし On voit sur la Terre toutes sortes de choses...」と、いささか素っ気ないものである。王子さまの言葉を真っ向から否定しないものの、積極的に「わが意を得た」という趣がない。王子さまのひらめきが正鵠を射たものであるなら、キツネは、もっと強い反応を示してよいはずである。

キツネは、「飼いならす *apprivoiser*」という言葉に強い関心を示す王子さまに、その意味を教えてやろうとしているのである。王子さまの言葉を素直に受け取ったのであれば、「よくわかってきたな!」と、少しは褒め言葉があってもいいところである。あるいは、「そうか、君にもそんな経験があったのか!」と、いくらか驚きがあってもいいところである。

ところが、キツネの反応には、そうした前向きの力強さがない。おそらく、王子さまの気づきは、師匠であるキツネ (芦田 2022) には物足りないであろう。まったく的外れではないにしても的中とはいえない。そうした経験があったのかもしれないが、肝心なのはそこではない。そういったニュアンスがうかがえる。

そもそも、王子さまは、なぜ「わかってきた」つもりになったのか? ここで王子さまは、花に水をやりたり、防寒の覆いをかぶせてやりたり、風よけを立ててやりたり、虫を取ってやりたりと、いろいろ「花」の世話をしたことを思い出したと捉える論者もいる。前述の加藤もそのひとりである。それなら、「花」が王子さまを飼いならしたのではなく、王子さまが「花」を飼いならしたのである。

しかも、キツネは、「飼いならす」ことと「花の世話をする」ことが王子さまの経験や記憶のなかで結びつくようなことを、まだ何も言っていないはずである。だからこそ、王子さまは、もっと後になって、

「飼いならす」には「どうすればいいのか *Que faut-il faire?*」, あらためて尋ねなければならないのである。

もっとも、とてもコケティッシュな「花」のとりこになり、あがらうすべもなく身の回りの世話をさせられていたのでは、という思いが王子さまの脳裏をよぎった可能性はある。それなら、確かに、「花」は、ごく一般的な意味において、王子さまを「飼いならしていた」といえる。しかし、自己の利益のために他者を手玉にとるとするのは、キツネが追い追い論ずところの「飼いならす」とは真逆の振る舞いである。

それなら、王子さまは、なぜここで「わかってきた」つもりになったのか。おそらく、キツネのいう「世界にひとつだけ *unique au monde*」という言葉に反応したのだと思われる (そもそも、キツネはまだそのことしか言っていない)。

王子さまは、5千ものバラの花を見たとき、自分は、「一つだけの (一点ものの) 花 *une fleur unique*」を「所有」していると思っていたのに、それは、ありきたりのバラの一本に過ぎなかったと泣く (20 章)。ところがここでは、「飼いならす」ことで「世界にひとつだけ *unique au monde*」になるという因果律を聞かされことで、逆に、「花」が「一つだけ」と自称していたことを思い出して、「王子さまを飼いならしていた」という推論がはたらいたということであろう。

しかし、ここで王子さまが理解している「一つだけ *unique*」は、キツネがいうところの「一つだけ *unique*」とは違う。王子さまにとって、「花」は初めから (数量的に)「一つだけ *unique*」として王子さまの前に現れている。しかし、キツネが言っているのは、「飼いならす」というプロセスがあってこそ、誰か (何か) が「ひとつだけ *unique*」になるということである。

キツネは、飼いならせば (飼いならされれば)、10万人のなかの一人にすぎない少年が「世界にひとりだけの少年 *unique au monde*」になり、10万匹のうちの一只にすぎないキツネが「世界にいっぴきだけのキツネ *unique au monde*」になるという。そういう意味では、初めから数量的に世界に一本しかない花であっても、それだけで「世界にひとつだけの花 *unique au monde*」になる (なれる) わけではない。

数量的に「一つだけの花=一点ものの花 *une fleur unique*」も質的 (关系的) に「ひとつだけの花=かけがえのない花 *unique au monde*」になるためには、やはり「飼いならす」という過程が必要不可欠である。そうでなければ、「一本だけの花」といえて、「一本だ

けの特別な花」というよりも、「一本だけの孤独な花」にすぎないのかも知れないのである。

3. 「生きるということ」の変容

それに、そもそもキツネは、なんだってある地球でも滅多にはない事がら、すなわち「あまりに忘れられていること *une chose trop oubliée*」について語っているはずである。ところがキツネは、王子さまの「飼いならされる」という稀有な（はずの）体験にはまるで興味を示さず、王子さまが「よその星」からやって来たことを知ると、その星の居心地のほうに強い関心を示す。そして、王子さまの星にはキツネを狩る人間たちはいないが、キツネの餌になるニワトリもおらず、「完璧なものはない一つない *Rien n'est parfait*」ことを確認すると、それ以上、その星での王子さまの生活や「花」との関係に興味を示すことはない。

砂漠に不時着した「ぼく」は、そこに現れた少年（王子さま）が「よその星 *une (les) autre(s) planète (s)*」からやってきたことに気づくと、とても「不思議な気分にとらわれている *intrigué*」。そして、「もっとよく知りたい気分に駆られ *Je m'efforçai donc d'en savoir plus long*」, 王子さまの回想に耳を傾けることで、この物語が紡がれてゆく (3章)。

キツネも、王子さまが「よその星 *une autre planète*」からやってきたことに気づくと、一応は、「ぼく」と同じく「とても不思議そうな *très intrigué*」な顔をしている。しかし、キツネは、「ぼく」とは違い、その星での王子さまの生活や地球にやってきた理由について「もっと知りたいという気持ちに駆られる」ことはなかったとみえ、対話の焦点を、自分にとってのその星の住み心地へと向けかえている。そして、王子さまの星が自分にとってそれほど魅力的ではないとわかると、今度は地球での自分の生活へと話題をつないでいく。キツネは、自分のことにしか関心がないようで、せっかく「わかってきた」という王子さまのアピールは、すっかり打ちちゃられている。

キツネは、「なんでもある」はずの地球での生活ぶりを嘆く。キツネが言うには、自分を追いかける人間たちがみな「似たり寄ったり *se ressembler*」なら、自分が追いかけるニワトリたちもみな似たり寄ったりであり、「自分の生活は単調 *ma vie est monotone*」で「少し退屈している *je m'ennuie donc un peu*」。それに、キツネはパンを食べないので麦など役に立たないから、「麦畑を見ても何の感興も覚えない *Les champs*

de blé ne me rappellent rien」。「それは、悲しいことである *c'est triste!*」。

しかし、飼いならしてくれれば、その光景は「素晴らしいものになるだろう *ce sera merveilleux!*」。王子さまは「金色の髪の毛 *cheveux couleur d'or*」をしているから、「金色の麦畑 *le blé qui est doré*」を見ると王子さまのことを思い出すだろうし、麦畑をふきわたる風の音も好きになるだろう。

そして、キツネは、「飼いならしてもらおう」ことによる「生きるということ *ma vie*」の変容の素晴らしさを説き終わると、長いあいだ黙って王子さまを見つめたうえで、満を持したかのように、「お願いだから、ぼくを飼いならして *S'il te plaît... apprivoise-moi!*」と頼んでくるのである。

「飼いならす」ということは、もともとは、王子さまがキツネと遊んでもらうための条件（前提）だったはずである。ところが、キツネの言葉やしぐさは、キツネのほう王子さまにお願いしているかのように、いつの間にか変化している。じっさい、「孤独」なキツネが王子さまに「友愛」を求めた場面と解釈している論者は少なくない。両者の出会いにおいて、まずキツネが王子さまに声をかけてきたという経緯からしても、その可能性はある（ただし、その論拠が薄弱であることについては前稿（芦田 2022）で指摘した）。

キツネに「友だち」がいるのか否かは、判然としない。ただ、少なくともキツネ自身は、王子さまのように「自分は独りぼっち *Je suis seul*」(19章) だとは、ひとことも言わない。他方、王子さまは何度も「悲しい *triste*」と繰り返すが、キツネも、こちらは王子さまと同じく、自分の生活を「悲しい」と言う。しかし、キツネがそう言うのは、王子さまのように「孤独」だからではない。

キツネが訴えているのは、すでに見たように「単調」と「退屈」である。キツネが追いかけてこする人間たちもニワトリも、みな似たり寄ったりで代わり映えしない。パンを食べないキツネには、麦畑などなんの面白味もない。そうした張りのない胸のうちを「悲しい（寂しい）ことだ」と明かしているのである。そうだとすると、キツネは、孤独からではないにしても、単調で退屈な生活から抜け出すために、「飼いならしてくれ」と懇願しているようにも見える。

しかし、「飼いならす」は、キツネが孤独な王子さまと遊んでくれるための条件だったはずである。仮にキツネが単調な生活に退屈しているにしても、遊び相手を求めたのは王子さまであり、キツネはそれを拒否

しているのである。したがって、「飼いならして!」というキツネの言葉を、そのままキツネからの「懇願」と受け取るわけにはいかない。

キツネにとって、人間たち(狩人)に撃たれないかどうか、ニワトリを手に入れられるか否かは、砂漠に不時着した「ぼく」と同じく、「生きるか死ぬかの問題 *une question de vie ou de mort*」(2章)のはずである。他方では、人間たちから身を守るスリルもあれば、人間たちを出し抜いて獲物をせしめるわくわく感もある。キツネの言う「似たり寄ったり」の「追いかけっこ *chasser*」は、実は「狩るか、狩られるか」の命がけであって、「少々退屈している」などと言うほど、安閑としたものではない。

他方、村びとたちが「儀礼 *rite*」(舞踏会)を執り行う毎週木曜日は、キツネにとっても特別な儀礼(祭り)の日である。この日は、人間たちに追われる心配もなく、「散歩がてらブドウ畑まで足を延ばす *Je vais me promener jusqu'à la vigne*」という、非日常的な楽しみもある。おそらくこの賢者は、「すっぱいブドウ」などと負け惜しみを言う(イソップ物語)必要もなく、ハレの日の美味にありつく狡知も身につけているのであろう。キツネ自身が言うように、その生活にはすでに「すばらしい日 *jour merveilleux*」が用意されているのである。この面でも、「少々退屈している」などと、不平をもらす必要もないはずである。

このように、これまでのキツネの説明からは、キツネ自身にはあえて「飼いならして!」と懇願しないといけない事情はないように思える。それでもキツネはそれを求めているのであるから、別の理由があるはずである。キツネは、実は、王子さまにこそ、かつての孤独で単調で凡庸な生活とその劇的な変容の経験を思い出させようとしているのではないか。キツネの言説はいつも、自分の関心と都合ばかりを語っているようでありながら、その実、つねに、王子さまに何かを気づかせようとしている。

ちっぽけな星に独りぼっちで暮らし、「とても簡単だ」(チョロイ)が、「とても退屈な」(カッターイ)星の手入れをルーティン・ワークにしていたのは、王子さまのほうである。そして、そんな生活がたまらなく悲しくなると、「夕陽の優しさ」を唯一の「気晴らし」にしていたのも、王子さまのほうである。その「憂鬱な小さな暮らし」が、輝くばかりに美しく魅惑的な「花」の出現で、明るい光といい香りに包まれた生活へと一変したことがあったのも、王子さまのほうである(芦田 2021: 100-101)。

「お願いだからぼくを飼いならしてくれ」というのは、おそらくキツネの懇願ではない。そうではなく、「飼いならす」ということを早々と「わかってきた」と言っていた王子さまが、さらにその後のキツネの話を聞いて、果たしてどれほど理解が進んだのか、あるいは、むしろ思い違いをしているのではないか、試そうとしているのではないか。

4. 飼いならすこと・飼いならされること

飼いならされれば世界の見え方が劇的に変わるというキツネの語りは、多くの論者が「詩的」と表現するように、美しく感動的である。ところが、その言葉は、肝心の王子さまの心には響かなかったように思われる。当初、「花がぼくを飼いならしてくれていた」という王子さまの言葉に、キツネは素っ気なかった。ところがここでは、キツネの熱弁に対して、王子さまはほとんど冷淡と言っていいほどに無反応である。

そのあげく、「飼いならして!」というキツネの「懇願」に対して、「そうしたいのはやまやま *Je veux bien*」だが、これから「友だちを見つけないといけない *J'ai des amis à découvrir*」し、「知るべきこともたくさん *beaucoup de choses à connaître*」あるので、「あまり時間がない *je n'ai pas beaucoup de temps*」と、やんわり断るのである。キツネの情感の熱度に比べ、王子さまは、はるかに理知的で冷めている。

王子さまは、「飼いならされる」ことの素晴らしさについてのキツネの長い話を聞くうちに、また、それを懇願するかのようなキツネの低姿勢を前にして、「飼いならす」という話題の発端がキツネと遊んでもらうために提示された条件であったことを忘れてしまったようである。

王子さまは、当初、ただ悲しくて、キツネに遊び相手を求めたのである。また、忘れ(かけ)ていた「(人間や友だちの)「探求」と「学び」という旅のテーマを思い出させてくれたのも、このキツネである(芦田 2022: 119)。そうだとするのに、ここに来て、キツネの依頼へのこの拒絶(逡巡)である。はたして「飼いならす」ということの理解は進んだのか。

ここで「飼いならしておくれ」と頼むキツネと「時間がない」と腰が引ける王子さまとの関係は、最初に「遊ぼう」と誘う王子さまと「飼いならされていない」と拒否するキツネとの関係を、ちょうど入れ替えた形になっている。しかし、その逆転は、王子さまの若さゆえの勘違いであって、むしろ、王子さまの早合点と

一知半解ぶりがはしなくも露呈したというのが真相であろう。

キツネは、王子さまの理解の不十分さを見て取ったようで、「飼いならしたのしか知ったことにならない *On ne connaît que les choses que l'on apprivoise*」と反撃に出る。キツネが言うには、それにもかかわらず、「人間たちは、もはや時間がなくて何も知ることができなくなっている *Les hommes n'ont plus le temps de rien connaître*」。

さらに、キツネは、「友だち」だって同じだとばかりに畳みかける。地球の人間たちは、なんでも「出来合いの品 *des choses toutes faites*」をお金で買えると思っている。しかし「〔既製品の〕友だちなどどこにも売っていないから *comme il n'existe point de marchands d'amis*」(友だちのようなものならいくらでも売られているのだろうが)、誰かを「飼いならす」ことなしには「友だち」はできないのである。げんに、それを知らない(忘れた)地球の人間たちには、「もはや友だちというものがいない *les hommes n'ont plus d'amis*」というわけである。

なぜ、人間たちには「飼いならす」ための時間がないのか。キツネは説明していないが、王子さまが地球にたどり着く前に出会った「ビジネスマン」がすでに教えてくれている。「ビジネスマン」は、3度にわたって「時間がない *pas le temps*」とうそぶく。「タバコの火を点けなす時間がない *pas le temps de la rallumer*」, 「ぶらぶら歩きする時間はない *pas le temps de flâner*」, 「夢想到ひたる時間などない *pas le temps de rêvasser*」と(13章, イタリックは芦田)。

なぜ、そんなにも時間がないのかと言えば、「星を何度も何度も数える *Je les [étoiles] compte et je les recompte*」という「仕事に追いまくられている *J'ai tellement de travail!*」からである(13章)。「このビジネスマンにとって、星とは金貨のことである *Pour mon businessman elles étaient de l'or*」(26章)。

地球の人間たちにとって、時間はそれほどにも貴重であるから、「時間の節約 *économie de temps*」も大切である。王子さまは、この後キツネと別れてから、一粒で一週間に53分もの(!?)水を飲む時間を節約できるという薬を売る商人に出会う(23章)。節約した時間で何をするのか。薬売りは「好きなことを *ce que l'on veut...*」と口ごもっているが、だいたい「ビジネスマン」と同様に、多かれ少なかれ「お金を稼ぐための何か」ということに行きつくことであろう。

時間を節約するためにお金を使い、お金を稼ぐため

に時間を使う。時は金なり。これこそが、「ビジネスマン」のみならず、すべての地位や職業の「おとなのひとたち *grandes personnes*」のモットーである。

「地球にはなんだってある」のだから、「飼いならす」ということも「ありうることだ」というのは、キツネの真意ではない。お金さえあればなんでも手に入る地球でさえ(むしろ、そのような地球だからこそ)「飼いならす」ということも「絆を結ぶ」ということも「あまりに忘れられていること」、すなわち、ほとんど「ありえないこと」なのである。

王子さまが地球にやってきて、寂寥とした夜の砂漠で出会ったヘビは、「人間たちのところだって、みな独りぼっちさ *On est seul aussi chez les hommes*」と「謎めいた *par énigmes*」ことを言っていた(17章)。キツネは、その「謎」を、理由をあげて、明かしてくれているのである。

そして、キツネは、もう一度「ほくを飼いならして!」と迫るが、一度目の「お願いだから *s'il te plaît...*」という、遠慮がちに口ごもったかのような前置きに代わって、今度は「友だちが欲しいのなら *Si tu veux un ami*」と、「友だちを見つける」ことを旅の第一命題とする王子さまには否定できない断固とした条件が付いていて、キツネがもとのメンター(師匠)としての主導権を取り戻したことがうかがえる。

それにしても、なぜキツネは、王子さまから「飼いならしてもらう」ことにこだわるのか。キツネは孤独で「友だち」を求めているとか、単調な生活に飽きて変化を望んでいるとかの理由は、一応なりたつ。じっさい、そうした解説も見受けられる(ただし、その論拠が薄弱であることについてはすでに指摘した)。(女子)学生の読後レポートでも、「私も王子さまに飼いならしてもらいたい」といった感想が珍しくない。

しかし、王子さまへのキツネの教えは、あげて、「自分から飼いならす」ことの大切さを説くものである。「飼いならしてもらう」ことを勧めたり、そのため心がけを説いたりすることは一度としてない。仮に、キツネが孤独で単調な生活から抜け出たくて友愛を求めているのだとしても、それなら、キツネが王子さまを飼いならせばいいことである。キツネが王子さまに「飼いならしてほしい」と頼むのでは、キツネ自身の所論と王子さまへの教えにそぐわない。ということ、ここは、ただの「懇願」ではない。

もっとも、動物のキツネが人間の王子さまを「飼いならす」というのは、言葉の本来の用法に照らして、不自然だと反論はありうる。しかし、この物語で

は、王子さまと動植物との関係は、基本的に対等である。だからこそ、王子さまは、「花が自分を飼いならしていた」と、抵抗なく思いついたのである（ただし、それはおそらく、王子さまの誤解である。また、王子さまが「人間」なのか、実ははっきりしない）。

王子さまは、「花を愛する気持ちは十分にあったにもかかわらず *malgré la bonne volonté de son amour*」, すぐに花への猜疑心にとらわれている。それは、「あまりに子どもすぎて、愛するすべを知らなかった *j'étais trop jeune pour savoir l'aimer*」ためである（8 章）。つまり、「『愛し方』がわからなかった、ということなのだ」（加藤 2007: 57）。「愛する」ためには、その「気持ち *volonté*」だけでは足りない。「飼いならす」ためにも、それがただの知識として「わかる *comprendre*」だけでは不十分である。

「飼いならす」ためには、それを実行できるだけの「すべを身につけている *savoir*」が必要である。後にキツネが「儀礼（作法）が欠かせない *Il faut des rites*」と教えるのは、そのことのひとつである。キツネは、「飼いならす」ことについてのひとりの「講義」を終えたいま、その「すべ」を身につけるための「実習」を課そうとしているのだと思われる。

王子さまは、キツネの気迫に押されてか、その気にはなったようだが、肝心の「飼いならし方」（作法）をまだ知らないわけだから、「どうすればいいの *Que faut-il faire?*」と頼りなげである。まだまだ先達の手取り足取りの手ほどきが必要なのである。

王子さまは、「友だち」を求めて「人間たち」を探している。しかし、キツネが教えるところでは、その「人間たち」は、「飼いならす」にしろ「絆を結ぶ（創る）」にしろ、そんな手間暇のかかる（「コストパフォーマンス」も「タイムパフォーマンス」も悪い）面倒なことは、とっくに忘れてしまっている。

キツネの言うとおりになら、「人間たち」から「友だち」にしてもらうことも、「絆」を結んでもらうことも、もはや「ありえない」。それは、「心から話せる人もいないまま、独りぼっちで生きてきた *J'ai ainsi vécu seul, sans personne avec qui parler véritablement*」（2 章）という、語り手「ぼく」の証言とも一致する。

しかし、その逆の可能性までもが失われたわけではない。誰かを「飼いならし」、「絆を創り」、「友だちにする」ことは、まだ「ありうること」である。そのためには、「飼いならす」ことが「わかる」だけでなく、その「作法」の修得も必須である。

そうすると、「飼いならして！」というキツネの「懇願」めいた言葉は、王子さまは気づいていないようだが、むしろ、「師匠」から「弟子」への「誘導」ないし「挑発」である。「飼いならす」ということが「わかった」のなら、また、そのつもりになって先を急ぐと言うのなら、その前に、「おれを稽古台にして飼いならしてみろ！」と。王子さまに課せられた「飼いならす」ことのレッスン、すなわち「生きる」ということの修行は、まだ道半ばである。

文 献

【*Le Petit Prince* のフランス語テキスト】

Le petit prince, Gallimard (Collection folio), 1999

【参照した邦訳書】

池澤夏樹訳 2005 『星の王子さま』集英社文庫

石井洋二郎 2005 『星の王子さま』ちくま文庫

稲垣直樹訳 2006 『星の王子さま』平凡社

倉橋由美子訳 2005 『新訳 星の王子さま』宝島社

河野万里子訳 2006 『星の王子さま』新潮文庫

小島俊明訳 2006 『星の王子さま』中公文庫

管啓次郎訳 2011 『星の王子さま』角川文庫

内藤濯訳 1953 『星の王子さま』岩波少年文庫

野崎 愼訳 2006 『小さな王子』光文社文庫

藤田尊潮訳 2005 『小さな王子 新訳『星の王子さま』』八坂書房

三田誠広訳 2008 『星の王子さま』講談社青い鳥文庫

三野博司訳 2005 『星の王子さま』論創社

山崎庸一郎訳 2005 『小さな王子さま』みすず書房

【その他の参考文献】

芦田徹郎 2021 「『星の王子さま』を読む (1) - 「子ども」であることと「おとな」になること」, 甲南女子大学研究紀要 I (57)

芦田徹郎 2022 「『星の王子さま』を読む (2) - 師と弟子と」, 甲南女子大学研究紀要 I (58)

稲垣直樹 2016 『翻訳技法実践論 - 『星の王子さま』をどう訳したか』, 平凡社

加藤晴久 2007 『憂い顔の『星の王子さま』』, 書肆心水

塚崎幹夫 1982 『星の王子さまの世界 - 読み方くらべへの招待』, 中公新書